

平成28年度名古屋市立大学看護実践教育モデル事業の活動報告

名古屋市立大学看護実践教育モデル検討委員会

脇 本 寛 子 (名古屋市立大学看護学部)
縦 野 香 苗 (名古屋市立大学看護学部)
委員長 堀 田 法 子 (名古屋市立大学看護学部)
平 岡 翠 (名古屋市立大学病院看護部)
水 野 千枝子 (名古屋市立大学病院看護部)

I はじめに

名古屋市立大学看護実践教育モデルは、名古屋市立大学看護学部と名古屋市立大学病院看護部が協働で行う、ユニフィケーション事業である。本モデルの目的は、名古屋市立大学看護学部と名古屋市立大学病院看護部が協働し、理論と実践の融合を図り、エビデンスに基づいた質の高い臨床看護実践ができる人材および地域住民の健康支援に貢献できる人材を輩出することである。目的を達成するために、「卒業時の臨床看護実践能力の質の向上を図る」「大学教育から現任教育への継続教育の発展に繋げる」「临床上の問題を科学的に探求する」「地域住民の健康を促進する」という4つの目標を掲げている。今回は、平成28年度の事業の実績と今後の課題を報告する。

II 平成28年度事業報告

前記した4つの目標達成に向けて、平成28年度は4事業「演習指導者の運用」「新人・中堅看護師の現任教育への参画」「共同研究の推進」「地域住民の健康を促進する」を運用した。

1. 演習指導者の運用

この事業は、目標「卒業時の臨床看護実践能力の質の向上を図る」に対応するものであり、平成28年度は学部専門科目8科目において、演習指導者のべ43名(表1)を配置することができた。配置した学部専門科目数、演習指導者数は、いずれも昨年度を上回った。

学生の意見として、「基本的知識に加えて、臨床での工夫点を教えて頂くことができた」「臨床に基づく方法を教えてもらえる」「今後の実習や就職してからも生かしていきたい」などがあり、科目責任者による評価として、「臨床での実施状況や応用方法について指導を受けることで、患者に合わせた個別性のある看護援助の実践

について理解を深めることができた」と考える。「学生の考えを引き出しながら指導して頂けた。」などがあり、学生に対する演習指導者の教育効果は大きく、演習指導者を配置する意義が十分に達成されていた。

演習指導を行った看護師のアンケートでは、演習に参加しての気づきとして、「学生が実習に来るまでの学習過程を知ることができた」「新人看護師がこのような演習を経て、技術を習得していくイメージができ、根気強く丁寧な支援が必要と感じた」「技術の習得に精一杯で、患者をイメージして行うところまで至らない現状がわかった」「看護職の育成には、看護学部と臨床の協力が不可欠であると実感した」などがあった。

また、演習指導者の経験をどのように活用しているか、もしくはしていきたいかの設問に対しては、「学内で学んでいることを理解して、臨地実習や新人教育の際に引き出しながら積み重ねられるよう活用したい」「学生や新人の特性を踏まえて、指導に活かすことができる」「慣れない技術を行う際は、患者が不在になりやすいことを意識し、指導を行うとともに、スタッフへも伝えていきたい」「想像していたよりも多くの基礎的なことを学んでおり、臨床で指導する中堅以上の職員の知識・技術の普及の確認を行っていきたい」「学生指導の質を上げ、長期的な目標として病棟に還元していきたい」などがあった。

上記のアンケート結果より、「卒業時の臨床看護実践能力の質の向上を図る」という目標達成に向け効果的であるとともに、担当した主任の人材育成に対する意識向上にも繋がったと考える。

日程調整が課題であった年度もあるが、今年度も師長と担当者の両者に書類を配布し、日程調整を早めに実施したことから問題なく対応することができた。

表1 演習指導者

学年	科目名	演習内容	日時	担当者	
1	看護援助論 IA	安楽な姿勢を保つ援助 (ポジショニング)	10/19(3,4限)	8階南 宮田公子 13階北 永田剛大	
		バイタルサイン測定 バイタルサイン測定 of 技術確認	11/30(3,4限) 12/14(3,4限)	7階北 川崎友香 OP 岡田悠揮	
		寝衣交換・足浴	1/11(3,4限)	11階北 井澤史恵 17階 浅井可奈子	
		洗髪・清拭	1/18(3,4限)	12階南 渡辺なり子 13階南 関 亜也子	
			1/25(3,4限)	10階南 佐藤こずえ 16階南 市原千花子	
2	看護援助論 IB	消化器／運動器のアセスメント	6/3(3,4限)	教育 吉田佳代 12階北 木下英里	
		呼吸器／循環器のアセスメント	6/24(3,4限)	15階南 大串陽子 14階北 岸由美子	
		車椅子・ストレッチャーによる移乗・移送	7/1(3,4限)	11階北 井澤史恵 10階南 佐藤こずえ	
		便器・尿器を使用した排泄の援助	7/22(3,4限)	15階北 佐藤裕美子 11階南 八代律子	
	看護援助論 IC	罨法・採血	11/7(3,4限)	ICU 柳田道男 救急 新里美由紀	
		皮下注射・筋肉内注射	11/28(3,4限)	14階南 清水真名美 15階南 加藤大貴	
		点滴静脈内注射	12/5(3,4限)	14階北 岸由美子 15階北 佐藤裕美子	
		導尿	1/16(3,4限)	11階南 八代律子 12階北 木下英里	
	看護援助論 III	小児のバイタルサイン測定	11/10(3限)	9階 山本房美	
		妊娠期・分娩期のフィジカルアセスメント	12/8(3,4限)	8階北 若林加菜子	
	3	生涯発達看護援助論 I	沐浴、新生児のフィジカルアセスメント、乳房ケア	6/21(3,4限)	8階北 若林加菜子 8階南 石川美江
				7/12(3,4限)	8階北 若林加菜子 NICU 西尾貴子
リハビリテーション看護論		高齢者の更衣、杖のつき方、車いす移乗、嚥下リハビリテーション	6/2(1,2限)	13階北 野口恵美子 教育 吉田佳代	
			地域療養生活看護援助論	高齢者の口腔ケア 排泄ケア(おむつの当て方)	7/14(1,2限)
7/21(1,2限)		17階 浅井可奈子 16階北 沢田磨乃			
生涯発達看護援助論 II		輸液ポンプとシリンジポンプの操作	7/27(3,4限)	ICU 柳田道男 9階 亀山敦史	
健康支援看護学 III		ICLS(緊急性の高い病態に対するチーム蘇生トレーニング)	6/13(3,4限)	14階南 清水真名美 救急 寺澤涼子	
			6/27(3,4限)	救急 加藤紀子	

2. 新人・中堅看護師の現任教育への参画

この事業は、目標「大学教育から現任教育への継続教育の発展に繋げる」に対応するものであり、平成28年度は看護部研修のうち、6つの研修において、看護学部教員のべ11名が参画した（表2）。具体的な達成目標として、看護部と看護学部が協働することで、新人・中堅看護師教育では、リアリテイショックの緩和、適応力の向上、アセスメント力の向上が、教育担当者と臨地指導者への教育では、指導力の向上、リーダーシップの向上が挙げられる。

新人フォローアップ研修では、看護学部教員がグループワークにオブザーバーとして参加した。グループワークに参加した教員にとっては、卒業した学生の成長の様子がわかる機会となった。新卒者として、できなかったことができるようになっていったこと（仕事の優先度、時間配分、先輩との関係構築、自己の生活調整など）をグループメンバーと共有することで、“社会人基礎力”を向上させると感じた。看護部と教員とのカンファレンスでは、昨年と同様にコミュニケーションスキルを高める教育を学生時代に工夫する必要性について話題となった。

臨地実習指導者研修では、現在、各部署で臨地実習指導者の役割を担っている職員を対象に、『臨地実習の基礎知識』について講義を実施した。研修後アンケートでは、講義内容が理解できたかの設問に対し、回答した者の中で「理解できた」53%、「やや理解できた」47%と、概ね理解されていた。意見としては「臨地実習指導者の役割を再認識できた」「今まで実習指導者の目的や必要性についてあまり考えられていなかったが、考える機会となった」などがあり、効果的な講義であったと評価する。

指導者研修（ビギナー）では後輩指導を担う初期の職員を対象に、『成人教育』についての講義を実施した。研修後アンケートでは、講義内容が理解できたかの問いに対し、回答した者の中で、「理解できた」66%、「やや理解できた」34%と、概ね理解されていた。意見としては「成人教育について体験を元に改めて学ぶことで身に付いた」「項目毎に説明していただき、自分に不足している部分が明確になった」「成人教育では自発的に学習できるような関わりが必要だと理解した」などがあった。また動画を取り入れた講義は、楽しみながら多くの気づきがあり、効果的な講義であったと評価する。

小論文の書き方は、全職員対象に希望者に実施した。研修後アンケートでは、研修の内容が理解できたかの設問に対し、回答した者の中で、「理解できた」47%、「やや理解できた」53%と、概ね理解されていた。また研修内容が役立つかの設問に対しては、「非常に思う」

60%「やや思う」が33%であり、研修後、実際に小論文を書いた職員からは、「講義で学んだことを意識して書いたことで、以前より整理してまとめることができた」との意見もあり、効果的な研修であったと評価する。

3. 共同研究の推進

この事業は、目標「臨床上の問題を科学的に探究する」に対応するものであり、平成28年度は以下の共同研究を進めている。現在は、共同研究の推進ができるよう、事業の展開方法について方略を検討している。

テーマ：「非鎮静化でMRI・CT・RI検査が受けられるためのプレパレーションの実践とその効果」

研究期間：平成26年3月～平成29年3月

看護学部：山口孝子、堀田法子

看護部：小川彩花、松井幸子、杉田なつ未

4. さくらやま知っとこ！セミナーの開催

この事業は、目標「地域住民の健康を促進する」に対応するものであり、平成27年度から活動を開始し、本年度は外来棟1階において3回開催し、第3回から第5回の開催となった（表3）。

セミナー開催後にアンケートを実施している。セミナーの「わかりやすさ」、「役に立ちそうか」については、毎回70～86%が「そう思う」と回答しており、好評であった。各回の参加人数は、20～55名であったが、開催場所の関係から参加人数は適切であった。昨年度の課題として、参加者への資料配布や資料提示方法があった。今年度は、資料は全て印刷して配布し、文字や図表の大きさを見やすく配慮した。その結果資料に関する意見はなく、対象者のニーズに対応することが出来た。

Ⅲ. 今後の課題

演習指導者の運用は、学生への教育効果および満足度ともに高いことから、演習指導者の意義が十分に達成されており、継続して推進していきたい。

新人・中堅看護師の現任教育への参画のうち、新人フォローアップ研修については、今後とも積極的に進めていくこととする。中堅看護師の現任教育は効果的であることから継続して実施したい。課題としては、担当者同士が直接打ち合わせをすることができなかったため、事前に講義内容の打ち合わせを行い、より研修目標が達成できるよう調整していく必要がある。

「さくらやま知っとこ！セミナー」は、好評であり、今年度は開催回数を3回とし機会を拡大した。名市大病院を受診されている地域の方々の健康支援のために、継続的に実施していくことが重要である。

表2 看護部研修

研修名	研修目的	対象者	講義担当
新人フォローアップ研修	専門職業人としての自己管理ができる	1年目職員 (97名)	グループワークオブザーバー 精神保健看護学 講師・小川雅子(7/21) がん看護・慢性看護学 准教授・池田由紀(7/22) 成育保健看護学 准教授・山口孝子(7/26) 日時:7/21、22、26(13:00～17:00)
	専門職業人としての自己管理ができる	1年目職員 (97名)	グループワークオブザーバー 精神保健看護学 講師・小川雅子(10/20) がん看護・慢性看護学 准教授・池田由紀(10/21、24) 日時:10/20、21、24(13:00～17:00)
	専門職業人としての自己管理ができる	1年目職員 (88名)	グループワークオブザーバー 地域保健看護学 准教授・尾崎伊都子(3/2) 成育保健看護学 准教授・山口孝子(3/3) 性生殖看護学 講師・中垣明美(3/6) 日時:3/2、3、6(13:00～17:00)
臨地実習指導者研修	1. 人材育成能力を養うことができる 2. 人を育てることで、喜びを感じることができる	ラダーレベル I 取得済み 職員 (36名)	講義:「臨地実習の基礎知識」 講師:地域保健看護学 准教授・尾崎伊都子 日時:7/7(13:00～17:00)
指導者研修(ビギナー)	教育の基礎知識を習得し、効果的な指導を実践する	ラダーレベル II 取得済み 職員 (85名)	講義:「成人教育」 講師:がん看護・慢性看護学 准教授・池田由紀 日時:8/12(8:35～9:20、 14:05～14:45)
小論文の書き方	論理的に小論文を書く力を養うことができる	対象者 (34名)	講義:「小論文の書き方」 講師:看護マネジメント学 講師・樺野香苗 日時:12/14(17:30～18:30)

表3 さくらやま知っとこ！セミナー

回	開催日	テーマ	担当者	開催時間	参加人数
第3回	7/19	熱中症の予防と応急処置	看護学部 嵩田理佳	10:00～10:30 12:30～13:00	計 55 名
		災害に備える	看護部 清水真名美	10:40～11:10 13:10～13:40	計 20 名
第4回	11/4	咳エチケットと適切なマスクの着用	看護学部 脇本寛子	10:00～10:30 11:30～12:00	計 22 名
		加齢？認知症？物忘れを予防しよう	看護部 外山敦子 渡辺美奈	10:40～11:10 12:10～12:40	計 41 名
第5回	1/26	減量のコツ～すっきりして春を迎えよう～	看護学部 尾崎伊都子	10:00～10:30 11:20～11:50	計 29 名
		転ばぬ先の「予防運動」	看護部 木下英里 山田真実	10:40～11:10 12:00～12:30	計 25 名

当事業は、平成25年7月から検討を重ね、平成26年度から活動を開始している。活動3年目を迎えた今年度は4事業の全てを運用し、いずれも運営を拡充できたことから、モデル事業としての役割を十分に果たすことができた。当事業を所掌する名古屋市立大学看護実践教育モデル検討委員会は、来年度から「看護実践教育共同センター」と名称を変更する予定である。今後もジェネラリスト育成のために、看護学部と看護部がより一層協働し事業を押し進めていきたい。



「咳エチケットと適切なマスクの着用」の様子



「加齢？認知症？物忘れを予防しよう」の様子



「減量のコツ～すっきりして春を迎えよう～」の様子



「転ばぬ先の『予防運動』」の様子



「転ばぬ先の『予防運動』」の様子